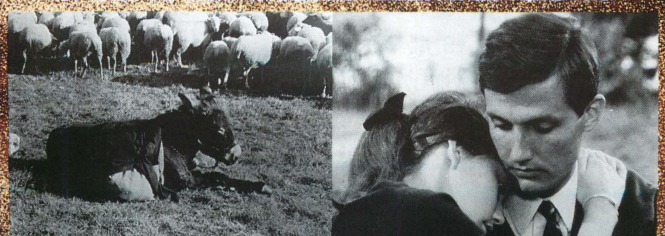
バルタザールどこへ行く

マリーとジャックに、バルタザールと
王の名をつけられたロバがいた
王は遍歴した…マリーと人間の業を見つめつつ
映画の美しさを極めた、巨匠ブレッソンの最高傑作

au hasard
Balthazar

ヴェネツィア国際映画祭審査員特別賞
ロベール・ブレッソン監督・脚本作品

●監督・脚本・撮影・台詞ロベール・ブレッソン●撮影ギラン・クロケ●美術ピエール・シャルボニエ●音楽シューベルト、ジャン・ヴィーネル
●アンヌ・ヴィアゼムスキー、フランソワ・ラファルジュ、ヴァルテル・グレーブ、ジャン・クロード・ギルベール●フランス・スウェーデン合作
PARC FILMS, ARGOS FILMS, ATHOS FILMS, SVENSK FILMINDUSTRI, SVENSK FILMINSTITUTET



フランス映画社配給
パウ・シリーズ作品

バルタザールどこへ行く

●ロベール・ブレッソン監督・脚本作品●ヴェネツィア国際映画祭審査員特別賞●au hasard Balthazar

BOW フランス映画社配給 バウ・シリーズ作品

"このロバはあらゆる人間の罪を背負った象徴である"[ブレッソン]

■監督のロベール・ブレッソンは1901年生まれ。日本では「スリ」、「ジャンヌ・ダルク裁判」、「やさしい女」、「白夜」そして今回の特別上映の4本が公開されている、世界で最も前衛的な映画作家の一人として畏怖され続けている巨匠である。映像と音のいっさいのムダを排除し、職業俳優を使わないことで有名。そして、そのキャストたちを一流のスタッフで支え、純粋で厳しく、崇高な美しさに溢れた作品で我々を魅了してやまない。

■ピレネーの小村の教師の娘マリーと農園主の息子ジャックは、生まれたばかりのロバに、バルタザールと名づける。10年後、バルタザールは鍛冶屋の労役に使われていたが、苦しさに耐えかねて逃げ込んだ所は、10年前のジャックの父の農園で、今はマリー一家が住んでいた。マリーは再会を喜び、バルタザールを連れ回して夢中になるが、それを快く思わないジェラールたち不良グループは、バルタザールを痛めつける…。バルタザールは様々な出来事に巻き込まれ、人間たちを見つめ、そして静かに死んでいくのだった。

■人手から人手へと渡っていくロバをめぐって、人間の本能と罪悪を至高の映像美で描いた「バルタザールどこへ行く」は、66年ヴェネツィア映画祭で審査員特別賞を受賞し、ブレッソンの最高傑作といわれている。

■ロバの名前となったバルタザールは、旧約聖書の神への冒瀆者バビロンの王、またキリスト生誕に駆けつけた東方の三賢人の一人を連想させる。しかし内容的には、2世紀ローマのアプレイウスの小説《黄金のろば》――魔女によってロバに変えられた人間が、放浪を続け、人間世界の裏を観察する――の影響を感じることができよう。

■「バルタザールどこへ行く」は、シンプルであるということ、そして明快であるということで、非常に私には通りの良い作品だと思う。この映画は美しい。そう、私にとってはただ美しいのみである・・・・

フランソワ・トリュフォー

(1970年公開時のアートシアター76号より)

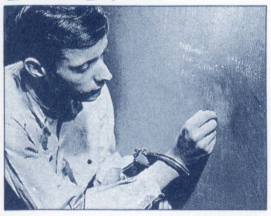
【スタッフ】
脚本／ロベール・ブレッソン、撮影／ギラン・クロケ、美術／ピエール・シャルボニエ、音楽／シューベルト、ジャン・ヴィーネル

【キャスト】
マリー／アンヌ・ヴィアゼムスキー、ジェラール／フランソワ・ラファルジュ、ジャック／ヴァルテル・グレーン、アルノルド／ジャン＝クロード・ギルベール●1966年フランス映画(仏＝スウェーデン合作)、全5巻、1時間36分(2,609m)、モノクロ、1×1.37
●PARC FILMS、ARGOS FILMS、ATHOS FILMS、SVENSK FILMINDUSTRI、SVENSK FILMINSTITUTET

魂を鼓動させる崇高な映像美 世界の巨匠ブレッソン傑作選集

抵抗

UN CONDAMNE A MORT S'EST ECHAPPE, OU LE VENT SOUFFLE OU IL VEUT



●脚本／ロベール・ブレッソン、原作／アンドレ・ドヴィニー、撮影／レオンス＝アンリ・ビュレル、音楽／モーツァルト●フランソワ・ルテリエ、シャルル・ル・クランシュ●1956年フランス映画、全5巻、1時間40分(2,754m)、モノクロ 1×1.37
● GAUMONT、NOUVELLES EDITIONS DE FILMS

実在のフランス軍人アンドレ・ドヴィニーが、リヨンのモンリュック監獄から4か月をかけて脱獄した体験の手記《ひとりの死刑囚が脱獄した》が原作。これが映画の原題となり、副題は《風はおのれの望むところに吹く》。自由を求める死刑囚の生と死の極限状態が、詩的緊張をはらんだ映像と極端に抑制された音の使い方で表現され、息づまるサスペンス空間と感動を生み出す。57年カンヌ映画祭監督賞受賞。

少女ムシェット

MOUCHETTE

●脚本／ロベール・ブレッソン、原作／ジョルジュ・ベルナノス、撮影／ギラン・クロケ、音楽／クラウディオ・モンテヴェルディ、ジャン・ヴィーネル●ナディーヌ・ノルディエ、ジャン＝クロード・ギルベール●1967年フランス映画、全4巻、1時間20分(2,207m)、モノクロ、1×1.37●ARGOS FILMS、ATHOS FILMS

アル中の父親、病気で寝たきりの母親を持つムシェットは、学校でも教師や級友から嘲笑の目で見られる。現実の生活の中に見出すわずかな心の救いも、周囲の人々の軽蔑と無理解から踏みつぶされ、次第に孤独と絶望感にとらわれ、生きる望みを失ってしまう…。ストイックな映像から、無垢とは何か、聖性とは何かが鮮やかに浮かび上がってくる。67年カンヌ映画祭カトリック協会賞、ヴェネツィア映画祭批評家賞受賞。

ラルジャン

L'ARGENT

●脚色／ロベール・ブレッソン、原作／トルストイ、撮影／エマニュエル・マシュエル＆バスカリーノ・デ・サンティス、音楽／バッハ●クリスチャン・パティ、カロリーヌ・ラング●1983年フランス映画(仏＝スイス合作)、全5巻、1時間25分(2,314m)、カラー 1×1.66●MARION'S FILMS、FR3、EOS FILMS

わずかな借金に困った少年が、友人から渡されたニセ札を使う。そのたった1枚の金が、多くの人々の運命を次々と狂わせていく…。「ラルジャン」とは、フランス語で金(かね)。ブレッソンはトルストイの《にせ利札》を現代パリに置き換え、金を神のように悪魔のように登場させ、その相克を描く。83年のカンヌ映画祭で、タルコフスキー監督の「ノスタルジア」ともどもグランプリと同格の創造大賞を受賞した。

弥生座ナイトムービー'96夏 〈巨匠ロベール・ブレッソン傑作選集〉

7/ 6(土)▶ 9(火) バルタザールどこへ行く(9:40終了)
7/10(水)▶12(金) 抵　　抗(9:45終了)
7/13(土)▶16(火) 〈14(日)休映〉 2本立(入替なし)
夜8:00 少女ムシェット
夜9:30 ラルジャン(10:55終了)

■特別鑑賞券発売中■
(1プロ)1,400円
(当日/一般1,700円、学生1,500円の処)
お求めは劇場窓口、みなみ会館、河原町ビブレ、梅田EST1、チケットぴあ、チケットセゾン他にて。

★連続鑑賞で更におトク!★
「バルタザールへ」にご来場の方全員にスタンプシートを配布。続いて「抵抗」にお持ち頂くと、前売料金に割引します。更に3プロ続けてご来場の方は、「少女ムシェット」「ラルジャン」の2本立を1000円に割引。前売よりおトクです。

★連日、夜8:00より1回上映★

京極弥生座1
新京極六角下ルマクドナルド3F 075(221)2744
・企画お問合せRCS＝075(315)7281